

植民地都市史研究の成果と課題

橋 谷 弘

- 1 はじめに
- 2 日本の植民地全般
- 3 台湾
- 4 朝鮮
- 5 中国
- 6 おわりに

1 はじめに

筆者は、2004年に『帝国日本と植民地都市』を上梓した¹⁾。これは、1990年代に依頼された植民地都市に関する二つの論文²⁾が発端になってまとめられたものだが、同時にそれ以前に公刊された、いくつかの先行研究に触発されたものであった。そして、そのころから日本の旧植民地都市に関する研究は各国で一層活発になり、研究の視角も多様化していった。本稿は、この30年余りにわたる日本の旧植民地都市に関する各国の研究動向を整理し、今後の課題を提示することを目的としている。

この間の研究の蓄積は膨大なものがあり、当然その全てを紹介することはできないので、本稿では単行本に限定して論じたい。このうち植民地朝鮮の都市史に関する研究動向については以前に簡単にまとめたことがあるが³⁾、今回は日本の旧植民地全体を出来るだけ網羅的にとりあげる。筆者が目にした本に限られるため、漏れたものも少なくないと思われるが、植民地都市史の研究動向を把握する一助になれば幸いである。

2 日本の植民地全般

日本の旧植民地を総覧して都市について論じた著作はそれほど多くないが、建築史の分野で精力的に成果を発表してきたのが西澤泰彦である。学術書として体系的にまとめられた[2008]では、台湾・朝鮮・中国東北（以下、満州と表記する）における「モノ」としての建築を通じて、その「用・強・美」という基本的要素の分析や、建築活動と侵略・支配との関連を論じている。[2009] [2011]では、豊富な図版を交えながら、植民地建築とそれを生み出した人や組織が具体的にわかりやすく説かれている。

植民地神社をテーマとした青井哲人 [2005] は、神社の分析を通じて植民地都市の特質を明らかにしている。まず神社の立地に関して、植民地行政機関が都市中心部の平地に置かれたのに対して、宗教施設(神社)は周辺部の山稜に置かれたことを指摘し、欧米植民地との違いを示唆する。境内は本国と同様に公園化が図られるが、これも時代と機能の変化で変容していく。また、ソウルに分立した三つの神社の背後に、居留民社会・総督府・軍隊による異なった目的を持つ祭祀の必要性が指摘される。このほか、日本の植民地支配の特徴を考える上での多くの論点が提示されている。

植民地に限らず、第二次大戦前の日本帝国の諸都市における最大のイベントは、博覧会だった⁴⁾。山路勝彦 [2008] は、国内外の博覧会に関する研究の一環として、植民地に関わる博覧会を総覧したものである。植民地都市における博覧会の意味よりも、むしろ日本からの視点を中心だが、後述のように台湾や韓国でも博覧会の研究が目立つので、基本的文献として参照されるべきだろう。第一部では日本本国における植民地を主題とする展示が論じられ、第二部で朝鮮、満州、台湾で開かれた博覧会が扱われる。論点は多岐にわたるが、植民地の「野蛮」を強調した見世物としての国内博覧会と、日本の「近代化」を印象付けるための植民地博覧会との対比が描かれている。

3 台湾

台北の都市計画に関しては、黄武達の一連の著作がある。このうち [1996] は論文集だが、[1997] がまとまった通史である。黄は台湾総督府報などの一次史料に基づきながら、台北の都市計画に関して、市区改正を中心とした萌芽期(1894-1904)、市区計画による体系的な都市計画が実施された展開期(1905-36)、台湾都市計画令以降の確立期(1937-45)の三期に区分している。また、[1998] は台北市に関わる法制度、[2000] は総督府と地方官庁の官報や地図など一次史料の紹介と解題になっている。どの著作にも多くの図版が収められており、後述の朝鮮に関する孫禎睦や中国東北に関する越沢明の業績と並ぶ、植民地都市計画の基礎的な実証研究である。

植民地都市を、現代都市の成立に至る歴史の中に位置づけることも重要である。蘇碩斌 [2007] は、このような観点から今日の台北の淵源を、清代と植民地期の台北に対する社会的な検討によって解き明かしている。このうち植民地期の台北について、蘇は「空間的均質化」「空間的視覚化」という観点からとらえる。均質化という点では、1920年に城内・艋舺・大稻埕という3つの市街が統一され、保甲制度などの植民地統治を通じて清代の移民による地方社会の分立が弱められたことを指摘する。視覚化という点では、公衆衛生・道路・都市計画などによる、空間形態の変遷に注目している。

また、現代の台北を歩きながら、歴史的背景に留意して都市景観を読み解いたのが、

Allen [2012] である。同書は地図、映像、交通、公園、展示、銅像などの表象を通じて台湾文化を論じたカルチュラルスタディーズだが、その随所で植民地期の事物の影響にも触れており、植民地都市研究の現代的な意義を考えるうえで様々なヒントを与えてくれる。

植民地都市を分析するときに建築の検討は欠かせないが、この点で興味深いのが、黃士娟 [2012] である。植民地の公共建築の設計者のほとんどが日本人であり、しかも官僚だったため、後述の朝鮮や満州を含めて本格的な研究は少ない。そうした中で、黄は『台湾日日新報』や『台湾建築会誌』などに依拠しながら建築技術官僚の系譜や彼らの作品についてまとめている。小冊子ながら、今後の研究の土台として重要であろう。代表的な建築家の森山松之助については、DVD も含むビジュアルなカタログとして、國史館 [2009] がある。

個々の建築に関しては、まず都市住宅をテーマとした沈祉杏 [2002] がある。沈は台湾、日本、西洋の住宅文化と住宅様式をまとめたうえで、現存する 17 棟の住宅の調査に基づいて、この 3 類型相互の影響を論じている。それぞれの住宅建築の分析としては説得力があるのだが、とりあげた事例は個人住宅とはいえ上流層の大規模な建築がほとんどで、庶民に至る台湾人全体の生活や文化に植民地期の住宅の変化がどのような影響を与えたかは、残念ながら十分に明らかになっていない。また、台湾では植民地期の公共建築の保存や再利用が盛んで、台南州庁舎を扱った范勝雄ほか [2011] などの解説書も多い。また、実測図や細部の写真を収めた傅朝卿 [1995] もある。韓国と同様に、地方自治の確立とともに公的機関が発行するこのような図録が増えているが、本稿では例示にとどめる。

台湾の植民地神社に関する研究が、陳鸞鳳 [2007] である。陳の研究は、台湾内の神社の分布、都市における神社の配置、神社境内の建物の配置などについて、地図や鳥瞰図を用いながら網羅的に紹介している点で有用である。また、神社跡地の処分や現況についても、よく調査されている。ただ、その結論は前述の青井も指摘している山稜上への配置や、皇民化政策との関連など既存の植民地研究の成果と重なる論点が多く、なかには風水の影響など日本側の史料の裏付けのない指摘もみられる。

地方都市に関するユニークな研究が、青井哲人 [2006] である。青井は台湾中部の小都市・彰化のフィールドワークに基づきながら、先行する伝統的台湾都市と、植民地に導入された市区改正や寺廟整理との関係を考察する。そして、先行する都市の原理に無頓着な植民地政策と、その下で形を変えながらしたたかに貫かれる伝統との微妙な「二重性」を描き出した。植民地都市の中に、支配者と被支配者の空間的分化による二重性を見出す研究は多いが、青井の指摘したような同一空間における重層的な二重性は、非常に興味深い論点である。

1920・30 年代にあらわれた都市のモダニズムをとりあげた個別研究や事例紹介として、カフェーに関する文可璽編著 [2014]、台南の劇場や映画館に関する厲復平 [2017]、台南の地方百貨店に関する陳秀琮 [2015] などの著作がある。このような現代的現象への注目は、後述の朝鮮とも共通するが、台湾に関しては図版による紹介が中心で文化史・社会史の本格

植民地都市史研究の成果と課題

的な考察はいまだ不十分である。むしろ文化論として面白いのは、李志銘 [2013] である。これは歴史研究というよりエッセーだが、広範な文献資料を用いて歌謡曲、鉄道、自動車など「都市の音」をとりあげ、植民地期から現代までの都市イメージを描き出している。このほか、ユニークなテーマとして都市の便所をめぐる政策を実証的に跡付けた董宜秋 [2005] では、初期の都市美観から後期の伝染病予防へと政策目標が移り変わっていくことが明らかにされたが、このような公衆衛生政策の歴史的意義の解明については、著者自身も指摘するように今後の課題として残された。

博覧会に関しては、呂紹理 [2005] がある。呂も前述の山路と同様に日本本国における台湾の展示と、台湾における博覧会の双方を分析している。そして「選択された展示」の意図に注目し、さらに博物館、消費、観光などのモダニズムとの関連や、1935年の台湾博覧会と翌年の台湾都市計画令による都市改造とのつながりなど、植民地の都市生活における博覧会の意味が多岐にわたって考察されている。台湾博覧会に関する図説としては程佳惠 [2004]、關正宗導讀 [2014] などがあり、現在も関心は高いようである⁵⁾。

また、欧米と違って日本の植民地では都市人口に占める支配側の人口（日本人）の比重が高かったが、在台湾日本人について様々な角度から分析した成果として卞鳳奎 [2016] がある。同書では、日本人人口の趨勢などを概説したあと、日本人エリート、台北の鹿児島県人や沖縄県人などの個別テーマが分析されている。都市住民以外に、金瓜石の金鉱山や花蓮の農業移民、宜蘭農林学校の教育内容などにも言及される。どれも豊富な史料に裏付けられており、多様な論点を読み取ることができる。

最後に、研究動向とはやや異なるが、台湾では韓国に比べて早くから植民地都市や清朝都市の景観を巡り歩くためのガイドブックが、多数刊行されてきた。その全てを紹介することはできないが、早い時期のものとして莊展鵬主編 [1992] は細部の図解を含み、地方都市を紹介した李世榮・呉立萍 [2003] もあり、近年では鳥瞰図や建物の内部構造などのスケッチで構成された徐逸鴻 [2013] や植民地期と現代の地図を対比させた中央研究院數位文化中心 [2016] も面白い。また、地図を集めた高傳棋 [2014] や、絵葉書による2冊の國家圖書館閱覽組編 [2007] もある。このような出版動向の背景として、香港などでもみられる高度経済成長を経た人々の「近い過去」への郷愁、国民党の独裁が終わったあとの「台湾ナショナリズム」、日本の「建築探偵」ブームの流入などが考えられるだろう。

4 朝鮮

植民地朝鮮の都市史研究の嚆矢となったのは、孫禎陸の一連の業績である。都市計画を論じた [1994] では、市区改正事業や市街地計画令の分析だけでなく、地方都市の計画や扶余神都建設も扱われ、また解放後の都市計画への負の遺産も指摘されている。植民地化過程を

扱った [1982] では主として租界や居留地の形成が分析され、[1986] では初期日本人社会の実態や近代都市インフラの導入が紹介される。植民地期を対象とした [1996] の 2 冊は、日本人と朝鮮人の居住地分化、土幕民、交通機関、売春制度など、のちに多様化する植民地研究のテーマの多くが先駆的に論じられている。このほか、孫の著作には解放後の韓国や朝鮮王朝時代の都市に関するものも多数あり、その広い問題関心と一次史料に基づいた綿密な叙述によって、すでに古典としての地位を確立している。なお、都市計画に関する総督府文書の解題としては、한국국가기록연구원 [2008] がある。

初期日本人社会と都市形成に関しては、이규수 [2015] と이연경 [2015] がある。前者は最初の開港場の一つ仁川の日本人社会を扱ったものだが、半分ほどは在朝日本人の研究動向や統計分析、農業移民政策が述べられ、後半で日本人居留民社会と地主の藤井寛太郎がとりあげられている。ただ、依拠するのは公刊された一般書がほとんどで、概説的な叙述である。後者は韓国併合前のソウルの、初期日本人社会が置かれたチンコゲ（のちの本町）に関する詳細な分析である。日本人の出身地、職業、企業や商店などが具体的に述べられ、そのあとで道路改修や建築、景観などが分析される。地図上に、商店や住宅などが多数特定されている点も有用である。

その後の在朝日本人社会については、都市史との関連に限らず植民地支配全体の評価と関わる研究が多いが、代表的なものとして研究史や方法論も含めた韓日米の共同研究である이형식 편저 [2013]、草の根の日本人社会に着目して植民地支配の特徴をとらえた Uchida [2011]、植民地化過程における日本人の朝鮮進出を論じた木村健二 [1989]、植民地期を通じて概観した高崎宗司 [2002] をあげておく。

都市別にみると、ソウル（京城府）をタイトルに掲げた本は意外に少ない。これは、植民地都市全般を論じた研究が、事実上はソウルを対象としていることが多いため、本稿で触れない学術論文を含めて当然ながらソウル研究は多い。そのうえ、1994 年のソウル建都 600 年を契機として、ソウル歴史博物館やソウル市史編纂委員会などの公的機関から多くの書籍が刊行され、植民地期に関わるものも多い。その全てをあげることはできないが、たとえば史料の復刻・翻刻である서울역사박물관 [2015] [2017] や김용하 외 [2017]、新聞雑誌記事索引의서울학연구소 [1998] [2006] のような刊行物が今後も続くと思われる。また、市史などの自治体刊行物も増加して内容の水準も高いが、本稿では割愛する。

このような状況の中で、「植民地都市京城」を正面から論じた力作が、김백영 [2009] である。同書では、国民国家単位のナショナル・ヒストリーよりも、グローバル資本主義や帝国-植民地間ネットワークの形成という視点から、世界の植民地都市との比較、朝鮮王朝時代の漢陽から植民地都市京城への転換、「大京城」への拡張の意味などが、様々な空間や象徴の分析によって論じられる。史料の裏付けだけでなく、広く世界の植民地研究の成果を参照して示唆に富む論点が数多く示されており、筆者も共感する部分が多いが、これについて

植民地都市史研究の成果と課題

は別の機会に改めて論じたい。このほか、ソウルの都市計画に関して, 염복균 [2005] が小冊子ながら必要な論点を提示している。강병식 [1994] は, それまで農村について論究されてきた土地調査事業の, ソウルにおける展開が紹介されている。

植民地第二の都市であった釜山に関しては, 多くの研究がある。홍순권 [2010] は, まず釜山の都市形成を概説したあと, 住民大会や府協議会・府会選挙の分析を通じて, 日朝の地域有力者の実態を分析している。同じ著者が編集した홍순권 외 [2008] [2009] は, 釜山の日本人社会と都市文化に関する共同研究の成果で, 多岐にわたるテーマが並んでいる論文集なのでコメントは割愛する。김경남 [2015] は, 開港以降の居留地と戦時期の釜山を対象として, それぞれの都市形成の過程と, 日朝の資本家グループの動向が分析されている。とくに戦時期については類書が少なく貴重である。ソウル・開城・仁川の朝鮮人資本家については, 이승렬 [2007] もある。坂本悠一・木村健二 [2007] は, 釜山と日本との関係に重点を置きながら, 日本人経済団体, 釜山府政, 連絡船や鉄道といったテーマが論じられている。

そのほかの地方都市に関しては, 허정도 [2005] が馬山を対象とする通史であり, 著者が建築家であるためか, 土地利用図, 埋め立て, 建築などの分析に重点が置かれ, それが利点にもなっている。박진환 외 [2013] は, 1920・30年代の東京・大阪・京城・仁川の都市計画と記念空間を比較したユニークな共同研究で, 記念空間としては, 明治神宮・大阪城天守閣・朝鮮神宮・仁川大神宮が分析されている。近代都市の分析を通じて, 植民地研究における「収奪論」と「近代化論」の二項対立を乗り越えようとする著者たちの意図は, 筆者も大いに賛同するところであり, 今後の議論の展開に期待したい。また, 都市史研究が南部の韓国の領域に集中しがちな中で, 羅津をはじめとする咸鏡北道の諸都市を扱った加藤圭木 [2017] は貴重である。加藤は, 日本の大陸進出の一つの拠点として再編された同地域の都市における「開発」の植民地性と, それによる在地社会の変容を, 地方行政文書をはじめとする豊富な史料の分析によって解き明かしている。

近代都市景観をタイトルに掲げた布野修二ほか [2010] は, 景観論にとどまらず, 植民地都市をめぐる多くの重要な論点をとりあげている。分析されるのは, 古都である慶州, 巨文島などの日本人移住漁村, 三浪津などの鉄道町で, いずれも地方小都市である。そして空間構造の変容や住宅様式の変化など多角的な分析が行われ, 著者たちの進めてきた世界の植民地都市に関する研究成果も随所に生かされている。アジアの都市を考える場合には, この本のように農村や漁村における人口集中地も視野に入れる必要があるが, 漁村について, 都市史とはやや異なる観点で調査した成果として단국대학교 [2011] があり, 後述の趙重義・權善熙 [2012] も日本人漁村を対象としている。

都市のモダニズムに関しては, 1920・30年代にあらわれた日本本国と共通する事物, 文化, 風俗を様々な角度から論じた김진송 [1999] が, 植民地研究に新たな視点を提示して刊行当時に話題となった。その後も, 漫文漫画を通じて同様の主題を扱った신명직 [2003],

日常の消費生活の変化に焦点を当てた論集である강영심 외 [2008] や Kendall ed. [2011], 写真の登場が引き起こした社会相を論じた이경민 [2008], ソウルの日系地場百貨店である三中井を論じた林 [2004], 事典のような小項目で近現代の事物をまとめた Lankov [2007] など、様々な書物の刊行が続いている。変化への着目だけでなく、現代史におけるこのような事象の位置づけを、さらに議論すべき段階にきているだろう。

博覧会に関して、学術書ではないが、イベントプロデューサーによる大部の著作として이득근 [2010] がある。同書は、大韓帝国による海外博覧会への参加から、植民地下の 1915・29・40 年の博覧会まで、当時のメディアの引用や数多くの図版によって詳細に紹介している。事実の提示が中心だが、今後の歴史研究の土台として参照されるべきだろう。

都市建築については、植民地期を含む一般的な近現代建築史の刊行が目立つようになったが、その多くは都市を論じるよりも個々の建物の紹介や分析である。その中で Jung Inha [2013] は、現在に至る都市化の進展の中に建築を位置づけ、植民地期については都市計画、住宅、建材がとりあげられている。住宅に関しては、都市住居研究会 [1996] が優れた共同研究であり、建築研究にとどまらず、生活様式の変化、住宅供給政策、解放後への影響などが論じられている。住宅建築そのものについては、김태영 [2003] が地方都市を含めて数多くの事例を紹介している。

以前の韓国では、台湾と違って植民地期の建築と街並みの保存や再利用に、必ずしも積極的ではなかった。これに関連して、1995 年の旧朝鮮総督府庁舎の撤去をめぐる議論として 박민철 외 [1995] がある。しかし、近年は旧京城府庁舎や旧京城駅舎の再利用のような新しい傾向がみられ、仁川では大里浩秋ほか [2010] が紹介するように、租界の街並みを観光資源として復元している。こうした動向の突出した事例として、植民地期の日本人漁村を復元して観光化した九龍浦を紹介しているのが、趙重義・權善熙 [2012] である。植民地建築のガイドブックも台湾ほど多くないが、たとえば 정운현 [1995] が出版文化賞を受賞し、近年は 마이어 [2015] のような朝鮮王朝時代や解放後の建築も含めた各種のガイドブックが出版されている。

5 中国

中国の日本植民地都市は、当然ながら満州に集中している。この地域の都市計画を幅広く分析し、植民地都市史研究の先駆となったのが越沢明の一連の業績である。[1978] は植民地都市史研究における最も初期の成果の一つで、「満州国」の時期を中心に、都市計画と都市化の具体像が概観されている。越沢の問題意識が明確になるのが新京（長春）を論じた [1988] と、ハルビンを論じた [1989] である。新京では、親水公園、グリーンベルト、開発利益の還元など当時の最先端の手法が用いられたことが紹介され、同書の副題にあるよう

植民地都市史研究の成果と課題

に日本本国の都市計画史における位置づけも示される。一方、ハルビンではロシアと日本の都市計画が対比されるが、時代背景の違いから単純な優劣は論じがたいという。これらの研究によって、日本都市計画史における植民地都市計画の位置づけは明らかになったが、植民地史における位置づけはさらなる議論が必要だろう。このほか、長春（新京）の都市計画については、楊家安・莫畏 [2008] がある。

清末から国共内戦までの東北の都市史をまとめた研究としては、曲晓范 [2001] がある。同書は都市計画、都市社会経済、交通、移民などを柱として、日本の政策だけでなく中国側の動きも視野に入れながら東北の都市化を論じている。また、日露戦争からアジア太平洋戦争の敗戦までの、大連における日本人中小商工業者の経済活動と生活を考察したのが柳沢遊 [1999] である。日本人の比率が相対的に高いのは、租借地大連でも同様であり、日本人商工業者の動向は都市史研究の重要なカギとなる。さらに、それまでの日本進出に関する研究が大企業に偏る傾向があったのに対し、同書は中小商工業者に着目した点で独自の意義がみられる。このほか中国都市の日本人に関しては、華北における動向をまとめた米卫娜 [2012] があり、人口統計や職業調査を使いながら具体的に分析している。

租界の置かれた都市と日本との関わりについては、朝鮮も含めてとりあげた大里浩秋ほか編著 [2010] がある。同書の前半は租界に関わる個別研究だが、後半で上海・青島・天津・武漢・仁川の租界建築の現状と修復について、現地調査を含めた具体的な紹介があり有用である。天津の日本租界については、学術書ではないが、天津市档案馆ほか編 [2012] で概要を知ることができる。

日中戦争中に日本が占領した都市に関しては、上海の Henriot & Yeh [2004]、香港の鄺智文 [2015] などの研究がある。どちらも都市史という枠組みではないが、前者の上海では、都市社会組織の抵抗と協力、都市経済、女性史などオーソドックスなテーマが扱われている。後者の香港では、既存研究の「植民地史観」「民族主義史観」を共に排して客観的に叙述するという問題意識の下で、日本の統治方針の不在と現地社会の動員の困難を描き出し、日中戦争以降のイギリスによる香港人の包摂政策と対比させている。日本軍占領と汪政権統治下の蘇州を描いた巫仁恕 [2017] では、脱政治的、享乐的な都市生活の中で、社会の両極化や自殺増加など負の側面を伴いながら、茶館・菜館・旅館・煙館という四大レジャー産業の「奇形繁栄」がみられたことが指摘され、重慶や昆明とも共通する「戦争下の繁栄都市」という特徴が提起された。香港についても、簡潔な叙述だが同様の視点が、周家建 [2015] に示されている。

また、戦時下の日本の勢力圏のうち、中国と朝鮮の諸都市をとりあげた共同研究が、柳沢遊ほか編著 [2013] である。同書では、「大東亜共栄圏」下のソウル・開城・蔚山・新京・大連・奉天・済南・青島の都市経済を、工業化、現地資本との対抗、都市間ネットワークなどの視点から分析し、「共栄圏」諸都市の経済的連携には限界があったことも指摘されてい

る。

近年、中国では都市建築や都市生活に関する写真集や図録が多数刊行されており、植民地都市に関わるものも少なくないが、数が多く都市史が考察されているわけでもないので、紹介は割愛する。植民地都市のガイドブックとしては、西澤泰彦 [1996] [1999] が、豊富な学識に裏付けられた好著である。

6 おわりに

以上のように、この 30 年余りの間に、各国における植民地都市史研究は厚みと広がりを増してきた。その中で、当初は都市計画や建築の実証研究から始まった研究対象は、やがて都市生活の具体的な姿や、1920・30 年代の現代的な都市文化の登場などへ関心を拡げてきた。研究の視点も、支配政策と民族主義の対立という、いわゆる「支配と抵抗」の図式だけでなく、都市住民の生活様式や意識の変化、本国と植民地のネットワーク分析などを視野に入れるようになった。19 世紀から現在まで、同じ空間に存在する近現代都市という場を研究対象とすることは、植民地研究にとどまらず、各地域の近現代史研究にとっても重要な課題といえるだろう。

最後に、今後の研究に向けて、変化への着目と比較の視点という二つの論点を提示しておきたい。

第一の論点は、都市化や都市文化を、植民地期に生じた変化の一つとして注目していく必要性和、その留意点である。植民地研究の進展によって、植民地期の社会が化石のように停滞していたわけではなく、一定の変化をみせていたことが明らかにされてきた⁶⁾。都市化や都市文化はその変化の代表的な事例だが、単に変化したという事実、あるいはその具体例を指摘することが、新たな問題提起となった段階は終わっている。しかし、近年増えてきた植民地の生活や文化を扱った書物の中には、好事家的に新しい事物（そして、現在からみれば「懐かしい」事物）を並べるだけで事足りりとするものが少なくない。歴史研究にもそれが影響を与えている面があるが、研究である限り事実の提示だけでなく、その歴史的意味の考察が必要である。変化は、「進歩」や「開発」を意味するだけではない。

変化の歴史的意味を考える際に、いくつか留意すべき点がある。まず、その変化は通史の中で位置づけられなければならない。20 世紀前半だけみると大きな変化のように感じられても、実はさらに大規模な都市化や現代化が 20 世紀後半以降にあらわれている。一方、植民地期の変化が 20 世紀後半以降に影響を残している面もある。通史の中で、それらを検討していく必要があるだろう。

また、そのような変化が日本の植民地に固有なものではなく、日本本国や半植民地の中国、場合によっては東南アジアの欧米植民地を含めた「共時性」を持つ点にも留意する必要がある。

植民地都市史研究の成果と課題

る⁷⁾。日本の植民地だけの突出した現象とみて、その「進歩性」と短絡させるという誤りを犯してはならない。

二番目の論点である比較の視点は、植民地都市史を都市史一般と比較すると同時に、各国の植民地都市と比較する必要性である。この30年余りの間に、植民地都市史だけでなく、各国の近現代都市史の研究も大きく進展し、問題関心も移り変わってきた⁸⁾。日本や欧米の都市史の論点や、アジア諸国が脱植民地化して工業化段階に入った都市史の論点を、積極的に植民地都市史にも取り入れることが重要である。もちろん、このように条件の異なる地域や時代の論点がある、そのまま日本の旧植民地都市にあてはまるとは限らないが、比較検討する意義は大きい。もう一つの比較の視点は、植民地都市の世界史的比較である⁹⁾。共通点も相違点も含めて、世界の植民地都市の中で、日本の植民地都市やアジアの植民地都市の特徴を探究することが必要だろう。

注

- 1) 橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、2004年。同書に関して、以下のような書評とコメントをいただいた。西澤泰彦「書評：橋谷弘著『帝国日本と植民地都市』」（『日本植民地研究』第18号、2006年6月）、柳沢遊「小特集：日本帝国勢力圏都市の形成と膨張の比較史」（『三田学会雑誌』第101巻第1号、2008年4月）。
- 2) 橋谷弘「植民地都市としてのソウル」（『歴史学研究』第614号、1990年12月）、同「植民地都市」（成田龍一編『都市と民衆』近代日本の軌跡9、吉川弘文館、1993年12月）。
- 3) 橋谷弘「朝鮮植民地都市史研究の歩み」（『朝鮮史研究会論文集』第52集、2014年10月）。
- 4) 伊藤真実子「博覧会研究の動向について：博覧会研究の現在とその意義」（『史学雑誌』第117巻第11号、2008年11月）。
- 5) 植民地都市と直接かかわらないので本稿は取り上げなかったが、台湾と博覧会に関して、松田京子『帝国の視線——博覧会と異文化表象』吉川弘文館、2003年にも触れておくべきだろう。同書は日本本国の内国勧業博覧会について論じたものだが、その中の台湾館の展示や、前提として人類学などの調査に触れながら、「他者」の表象や「われわれ」の姿などを考察している。植民地都市文化を多角的に論議しようとするとき、このような視覚がヒントの一つになりうるだろう。
- 6) 橋谷弘「日本における朝鮮近代史研究の新たな潮流：最近の日本・アジア関係史研究の進展と関連して」（『東京経学会誌』第205号、1997年12月）。
- 7) 橋谷弘「北東アジアにおける植民地都市の近代性をめぐって」（井上徹・仁木宏・松浦恆雄編『東アジアの都市構造と集団性：伝統都市から近代都市へ』大阪市立大学文学研究科叢書第9巻、清文堂出版、2016年3月）。
- 8) とりあえず最近の研究史として、松山恵「日本近代都市史研究のあゆみ」（『都市史研究』第2号、2015年11月）、森宜夫「近現代ヨーロッパ都市史における20世紀——「モダニティ」の変容を参照軸として——」（『歴史と経済』第237号、2017年10月）などがある。
- 9) たとえば、ロバート・ホーム（アジア都市建築研究会訳）『植えつけられた都市——英国植民地都市の形成』京都大学学術出版会、2001年のような研究成果の検討である。なお、布野修司

らアジア都市建築研究会の共同研究も注目すべきである。

文献リスト

I 日本の植民地全般

日本語文献 (著者名 50 音順)

- 青井哲人 [2005]: 植民地神社と帝国日本, 吉川弘文館
西澤泰彦 [2008]: 日本植民地建築論, 名古屋大学出版会
西澤泰彦 [2009]: 日本の植民地建築——帝国に築かれたネットワーク, 河出書房新社
西澤泰彦 [2011]: 植民地建築紀行——満州・朝鮮・台湾を歩く, 吉川弘文館
山路勝彦 [2008]: 近代日本の植民地博覧会, 風響社

II 台湾

日本語文献

- 青井哲人 [2006]: 彰化一九〇六年——市区改正が都市を動かす, アセテート

中国語文献 (著者名拼音順)

- 卞鳳奎 [2016]: 日治時期日人在臺灣移民之研究, 博揚文化
陳鸞鳳 [2007]: 日治時期臺灣地區神社的空間特性, 學富文化事業
陳秀珣主編 [2015]: 林百貨——臺南銀座摩登五棧樓, 臺南市政府文化局
董宜秋 [2005]: 帝國與便所——日治時期台灣便所興建及污物處理, 台灣古籍出版
黃士娟 [2012]: 建築技術官僚與殖民地經營 1895~1922, 遠流
黃武達 [1996]: 日治時代 臺灣近代都市計畫之研究・論文集 (1) (2), 臺灣都市史研究室
黃武達 [1997]: 日治時代 臺北市之近代都市計畫, 臺灣都市史研究室
黃武達 [1998]: 日治時代 臺北市近代都市之建構, 臺北市文獻委員會
黃武達 [2000]: 日治時代 臺灣都市計畫歷程之建構, 臺灣都市史研究室
李志銘 [2013]: 單聲道——城市的聲音與記憶, 聯經出版
厲復平 [2017]: 府城・戲影・寫真——日治時期臺南市商業戲院, 獨立作家
呂紹理 [2005]: 展示臺灣——權力, 空間與殖民統治的形象表述, 麥田出版
沈祉杏 [2002]: 日治時期台灣住宅發展 1895-1945, 田園城市
蘇碩斌 [2007]: 看不見與看得見的臺北——清末至日治時期臺北空間與權力模式的轉變, 左岸文化
文可璽編著 [2014]: 臺灣摩登咖啡屋, 前衛出版社

英語文献

- Allen, Joseph Roe [2012]: Taipei: city of displacements, University of Washington Press

III 朝鮮

日本語文献 (著者名 50 音順)

- 加藤圭木 [2017]: 植民地朝鮮の地域変容——日本の大陸進出と咸鏡北道——, 吉川弘文館
木村健二 [1989]: 在朝日本人の社会史, 未来社
坂本悠一・木村健二 [2007]: 近代植民地都市 釜山, 桜井書店

植民地都市史研究の成果と課題

高崎宗司 [2002]: 植民地朝鮮の日本人, 岩波書店

都市住居研究会 [1996]: 異文化の葛藤と同化——韓国における「日式住宅」——, 建築資料研究社

林広茂 [2004]: 幻の三中井百貨店——朝鮮を席卷した近江商人・百貨店主の興亡, 晩聲社

布野修司・韓三建・朴重信・趙聖民 [2010]: 韓国近代都市景観の形成——日本人移住漁村と鉄道町, 京都大学学術出版会

韓国語文献 (著者名가나다라順)

강병식 [1994]: 日帝時代 서울의 土地研究, 民族文化社

강영심 외 [2008]: 일제 시기 근대적 일상과 식민지 문화, 이화여자대학교출판부

김경남 [2015]: 일제의 식민도시건설과 자본가, 선인

김백영 [2009]: 지배와 공간——식민지 도시 경성과 제국 일본, 문학과지성사

김진승 [1999]: 서울에 탄스홀을 許하라——현대성의 형성, 현실문화연구

김태영 [2003]: 한국근대도시주택, 기문당

단국대학교 동양학연구소 편 [2011]: 일제강점기 울산 방어진 사람들의 삶과 문화, 채륜

박민철 외 [1995]: 건축은 없다?——구조선충독부철거반대건축·미술전문가발언집, 간향미디어

박진환 외 [2013]: 제국 일본과 식민지 조선의 근대도시 형성——1920/30년대 도쿄·오사카·경성·인친의 도시계획론과 기념 공간을 중심으로, 심산

손정목 [1982]: 韓国開港期 都市變化過程研究——開港場·開市場·租界·居留地, 一志社

손정목 [1986]: 韓国開港期 都市社會經濟史研究, 一志社

손정목 [1994]: 日帝強占期 都市計畫研究, 一志社

손정목 [1996]: 日帝強占期 都市化過程研究, 一志社

손정목 [1996]: 日帝強占期 都市社會相研究, 一志社

신명직 [2003]: 京城을 거닐다——만문만화로 보는 근대의 얼굴, 현실문화연구

염복규 [2005]: 서울은 어떻게 계획되었는가, 살림

이각규 [2010]: 한국의 근대박람회, 커뮤니케이션북스

이경민 [2008]: 경성, 사진에박하다, 산책자

이규수 [2015]: 개항장 인천과 재조일본인, 보고서

이승렬 [2007]: 제국과 상인——서울·개성·인천 지역 자본가들과 한국 부르주아의 기원, 1896~1945, 역사비평사

이연경 [2015]: 한성부의 ‘작은 일본’, 진고개 혹은 本町, 시공문화사

이형식 편저 [2013]: 제국과 식민지의 주변인—재조일본인의 역사적 전개, 보고서

허정도 [2005]: 전통도시의 식민지적 근대화——일제강점기의 마산, 신서원

홍순권 외 [2008]: 부산의 도시 형성과 일본인들, 선인

홍순권 외 [2009]: 일제강점하 부산의 지역개발과 도시문화, 선인

홍순권 [2010]: 근대 도시와 지방권력——한말·일제하 부산의 도시 발전과 지방세력의 형성, 선인

英語文献 (著者名アルファベット順)

Jung, Inha [2013]: Architecture and Urbanism in Modern Korea, University of Hawai'i Press

Kendall, Laurel ed. [2011]: Consuming Korean Tradition in Early and Late Modernity: Commodification, Tourism, and Performance, University of Hawai'i Press

Lankov, Andrei [2007]: The Dawn of Modern Korea: The transformation in Life and

Cityscape, EunHaeng NaMu
Uchida, Jun [2011]: *Brokers of Empire: Japanese Settler Colonialism in Korea 1876-1945*,
Harvard University Asia Center

Ⅳ 中国

日本語文献 (著者名 50 音順)

- 大里浩秋・貴志俊彦・孫安石編著 [2010]: *中国・朝鮮における租界の歴史と建築遺産*, 御茶の水書房
越沢明 [1978]: *植民地満州の都市計画*, アジア経済研究所
越沢明 [1988]: *満州国の首都計画——東京の現在と未来を問う*, 日本経済評論社
越沢明 [1989]: *哈爾濱の都市計画 1898-1945*, 総和社
柳沢遊 [1999]: *日本人の植民地経験——大連日本人商工業者の歴史*, 青木書店
柳沢遊・木村健二・浅田進史編著 [2013]: *日本帝国勢力圏の東アジア都市経済*, 慶応義塾大学出版会

中国語文献 (著者名拼音順)

- 鄭智文 [2015]: *重光之路——日據香港與太平洋戰爭*, 天地圖書
米卫娜 [2012]: *近代华北日侨问题研究 1871-1946*, 人民出版社
曲晓范 [2001]: *近代东北城市的历史变迁*, 东北师范大学出版社
天津市档案馆・天津市和平区档案馆・中国人民政治协商会议天津市和平区委员会 [2012]: *旧天津的日租界*, 天津人民出版社
巫仁恕 [2017]: *劫後「天堂」——抗戰淪陷後的蘇州城市生活*, 國立臺灣大學出版中心
楊家安・莫畏 [2008]: *伪滿时期长春城市规划与建筑研究*, 东北师范大学出版社
周家建 [2015]: *濁世消磨——日治時期香港人的休閒生活*, 中華書局 (香港)

英語文献

- Henriot, Christian & Yeh, Wen Hsin [2004]: *In The Shadow of the Rising Sun: Shanghai under Japanese Occupation*, Cambridge University Press

Ⅴ その他 (図録・目録・ガイドブックなど)

日本語文献 (著者名 50 音順)

- 趙重義・権善熙 [2012]: *韓国内の日本人村——浦項九龍浦で暮した (改訂版)*, アルコ [浦項]
西澤泰彦 [1996]: *図説「満州」都市物語——ハルビン・大連・瀋陽・長春*, 河出書房新社
西澤泰彦 [1999]: *図説大連都市物語*, 河出書房新社

中国語文献 (著者名拼音順)

- 程佳惠 [2004]: *台灣史上第一大博覽會——1935 年魅力台灣 SHOW*, 遠流
傅朝卿 [1995]: *台南市日據時期歷史性建築*, 台南市政府
范勝雄・陳柏森・黃斌・傅朝卿 [2011]: *舊建築新生命——從臺南州庁到國立臺灣文學館*, 國立臺灣文學館
高傳棋 [2014]: *古地圖看台北*, 玉山社
國家圖書館閱覽組編 [2007]: *日治時期的臺北*, 國家圖書館
國家圖書館閱覽組編 [2007]: *日治時期的臺南*, 國家圖書館

植民地都市史研究の成果と課題

- 國史館 [2009] : 打造台灣公共建築風貌的舵手 森山松之助, 國史館
關正宗導讀 [2014] : 1935 臺灣博覽會寫真照片, 博揚文化
李世榮·吳立萍 [2003] : 臺灣的老鄉鎮, 遠足文化
徐逸鴻 [2013] : 圖說日治台北城, 貓頭鷹
中央研究院數位文化中心 [2016] : 臺北歷史地圖散步, 台灣東販
莊展鵬主編 [1992] : 臺北古城之旅, 遠流

韓国語文献 (著者名가나다라順)

- 정운현 [1995] : 서울시내 일제유산답사기, 한울
김용하·도미이 마사노리·도다 이쿠코 [2017] : 조감도와 사진으로 보는 1930 년대, 土香
마이여, 울푸 [2015] : 서울 속 건축, 안그래픽스
서울역사박물관 [2015] : 大京城府大觀, 서울역사박물관
서울역사박물관 [2017] : 各町洞職業別戶口調書, 서울역사박물관
서울학연구소 [1998] : 일제하 조선일보중 서울 관련기사 색인 I·II, 서울학연구소
서울학연구소 [2006] : 일제하 잡지중 서울 관련기사 색인, 서울학연구소
한국국가기록연구원 [2008] : 조선총독부도시계획기록의이해 — 평가분석서, 진리탐구